

私は小学六年生のときに奨励会に六級で入りました。入会から二年ぐらいで二段まで上がつたので、昇級昇段のスピードはけつこう早いほうだったかもしれません。ただ二段から三段に上がるまで二年くらいかかりました。また三段リーグには六年半もいましたから苦労して四段（プロ）になったほうでしょう。二段から停滞してしまった原因を思い返してみれば、高校に行って遊んでいたからかなと思わないこともないのですが、学生時代に将棋をおろそかにしていたわけでもありませんし、本当の原因が何だったのかはちょっとわかりません。

人は伸びるときに伸びるけれど、だめなときは全然ダメなのかもしれないな、ということを感じたことはありました。

高校に通っていると規則正しい生活をするので、将棋のプラスになる面もけつこう大きいと思うのですが、一生懸命やっていたつもりでも、その度合いが足りなかつたのかもしれません。周りの人が私よりも一生懸命にやっていたからかもしれませんし、当時のやり方というか戦略的な面が足りていなかつたのかもしれないと思うところもあります。対戦相手に対する事前の作戦の準備のようなどころが、まだうまくできていなかつたのかもしれません。

兄弟子では三年先輩の丸山忠久九段も大学に行つたんですが、そのときも師匠が「行くな」と言って、丸山さんは「はい」と答えながら結局大学に進学しちゃつたんですね。それで師匠はかなりおかんむりだった。

「丸山は行つたけど、木村は行かねえだろ？」と言われて、当時は私も「はい！」と答えていたんですけど、三年後にやっぱり私が大学に進学してしまつたら、えらい剣幕で怒られました。「俺の言つたことがわからなかつたのか」という感じでお説教を受けました。

兄弟子の米長邦雄先生（故人）をはじめとして、師匠の教えを聞かずに進学するというのが佐瀬門下生の伝統芸のようなところがあります。米長先生も大学進学を反対されて「師匠の言うことを聞いてるようじや師匠どまりだ」と言い返したという有名な逸話があります。

自分のなかでは師匠に逆らおうというつもりはなく、結局自分で決めるものだと思つています。

# 百折不撓の受け師

—敗北から立ち上がり続ける理由—

木村一基

(将棋棋士)

2019年に最年長での初タイトル奪取で話題をさらった

「千駄ヶ谷の受け師」こと木村一基九段。

年齢による衰えは誰もが通る道だが、それを覆した“中年の星”は、新星が次々と現れる棋界をどう見ているのか。

今なら違う選択をしたかも

した。ですから師匠にどう言われようと自分の意志で大学に進学したと思います。当時は大学に行つてみたいという気持ちと、きちんとやることさえやつていれば将棋も四段に上がれると思つていましたが、今の自分であれば違う判断をしたかもしれません。

今の奨励会では、ずっと将棋だけをやつていないと勝ち上がれない。それくらい厳しいですし、昔よりも余裕がない、というふうにとらえています。私たちが奨励会で修業していた当時のほうまだ、今よりも緩やかだつたかなあとは思います。現代は競争が熾烈を極めており、時間がいくらあっても勉強する時間が足りないという感じになつていますので、そういうなかでは進学して違うことを学ぶという余裕はないかなと思います。

ただ、私自身が大学に行つたことは、自分で決めたことですし、後悔はしていません。もし迷つている後輩がいて相談を受けても「自分で決めろ」と言いますね。

三段リーグでは、惜しくも昇段を逃すという経験もしました。最終日にあと一つ勝つといれば上がりという大きな一

この続きは本誌でどうぞ！

番に負けて、しばらく腐っちゃつて、けつこう深刻に悩んだりもしましたが、最後は「将棋を一生懸命やつてそれでダメならしょうがない」と思つて、結局歯を食いしばつて将棋をやるしかなかつた。負けて四段昇段を逃した後に、そんなふうに取り組めたことに関しては、しつかりできたと思います。

三段リーグに入つてから、しばらくすると「一日で二局負けることが半年をパア

撮影=幸田 森

